

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 11 日現在

機関番号：34436

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370220

研究課題名(和文) 正倉院文書の読解を通した上代文学の表現の生成に関する研究

研究課題名(英文) A study regarding to generation of expression in Early Japanese Literature through "Shosoin Documents"

研究代表者

中川 ゆかり (NAKAGAWA, YUKARI)

羽衣国際大学・人間生活学部・教授

研究者番号：30168877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：奈良時代の下級官人達を書き表した膨大な文書の集積である正倉院文書を読み解くことによって、当時の官人達の書く文章の実態・人間関係のあり方・信仰の様相を明らかにした。又、『古事記』や『日本書紀』・『風土記』には見えない言葉を発掘し、上代語の知見を広める事が出来た。さらに、正倉院文書の文章とそれらと比較することによって、それぞれの作品の文章の性格を浮き彫りにし得た。

研究成果の概要(英文)：To clarify actual status of composition which was written by low-ranked officers, their relationship, and aspect of their belief by analyzing Shosoin documenta accumulated a number of documents written by the officials in Nara period.
Additionally, succeeded to obtain the knowledge of ancient period of Japanese by discovering words which is not appeared on "Kojiki", "Nihon Shoki" and "Fudoki". Moreover, revealed each characteristics by comparing with construction between "Shosoin documents" and other three documents.

研究分野：上代文学

キーワード：正倉院文書 手紙 相手に語りかける言葉 相手を説得する表現 感情を表す言葉

1. 研究開始当初の背景

上代文学の研究は主に『古事記』・『日本書紀』・『風土記』・『万葉集』を対象に行われている。後の時代の文学作品の豊富さに比べると、その量はあまりにも少ない。また、その書き手も多くが特定の知識人である。表現を考えるに当たっても、当時の生活の具体相・通行の日本語の文章や信仰のあり方等を知らなければ比較検討することもできない。

正倉院文書は奈良時代からの伝世文書である。書写による誤りも考慮せずすむ優れた資料である。ただし、その活用は主に歴史学と一部の国語学の研究に限られていた。上代文学の研究の対象に正倉院文書を含めようという動きは皆無であった。

2. 研究の目的

そうした状況を打破するために、豊富な情報量を有し、かつ紛れもなく奈良時代のものであるという来歴の確かさを持つ正倉院文書を視野に入れた研究を行おうと考えた。

当時の文章の書き手の大半を占める下級官人の文章と『古事記』・『日本書紀』・『風土記』の文章を比較することによって、それぞれの作品の個性を浮き彫りにする事を目的とする。

3. 研究の方法

当時の文章の書き手の大半を占める下級官人の文章と『古事記』・『日本書紀』・『風土記』の文章を比較することによって、それぞれの作品の個性を浮き彫りにする。

まず、正倉院文書を一点、一点読解することに努めた。どのような表現を用い、自分の考えを伝え、相手を説得しているかを注意深く読み取るうとした。

4. 研究成果

正倉院文書中の漢文助字「耳」の使い方を精査し、用法を分類検討することによって、日本の上代の漢文助字「耳」の用法に新しい知見を加えることが出来た。さらに、『古事記』や『風土記』・『日本書紀』・『日本霊異記』等と比較することによって、それぞれの作品が何を主張することに力を込めていたかを探る事が出来た。

『古事記』はたとえ上位の人に対してもどうしても言わずにおられないことに関心を持ち、播磨国風土記は瓦を作るのに良い土を見いだした天皇の喜びの声を強調するのに「耳」を付していた。

『日本霊異記』は仏教的な善行を修めれば良い報いが、悪行をなせば悪い報いがあることを説くときに「耳」を用い、強調するというという仏教説話集らしい用法を見せている。

正倉院文書中でもっとも「耳」が付されることが多いのが命令する文である。これは職務上の連絡を伝える文書が多いという正倉院文書の特徴を強くあらわしている。そもそも、命令の文に「耳」を付す用法は漢籍に確

認できない。また、『古事記』や『風土記』・『日本書紀』・『日本霊異記』等にも見いだせない。これらの作品は漢籍に詳しく、漢文の素養のある人の手になるからであろう。

一方、正倉院文書の書き手の多くは下級官人である。職務上の必要に迫られ、文書の書き方を学んだ人たちであった。彼らは乏しい知識を駆使して、仕事を進めるために説得力のある文章を書かねばならなかった。そのため、強調の効果のある「耳」が命令文に付される事が多くなったのであろう。こうした漢文の規範から逸脱した書きぶりは正倉院文書にはしばしば見られるものである。

また、漢文助字「者」についても、正倉院文書を視野に入れることによって、事物を強調する役割を明らかにすることが出来た。

正倉院文書は職務上の連絡の文書を多く含むので、上下関係のある両者の言葉づかいのあり方を知ることができる。

たとえば、相手に向かって「彼」 - そちら - と呼ぶのはその相手が対等か下の立場の人で、目上には使えない。こうした言葉の性格は相手に向かって語りかける文書 - いわゆる手紙だが、職務上の内容が多いのが正倉院文書の特徴 - が正倉院文書に多く含まれるから抽出できるものである。

その結果、国書中に使われる「彼国」をめぐって、奈良時代から平安時代初頭にかけての日本の外交方針の理解が深まった。つまり、日本は一貫して渤海を「彼国」と呼び、相手に臣下としての礼を取らせようとする。

対する渤海は日本と対立することは避けつつ、同時に対等な関係をできる限り保とうとする。その駆け引きにおいて案出されたのが「貴国」という言葉であった。古代の日本・渤海間の緊迫した外交の様相が「彼国」という言葉の追求から実感する。それを可能とするのが正倉院文書の文書の集積なのである。

さらに、この「貴国」の解明が難解な『日本書紀』中の「貴国」に光を当てることになる。書紀の「貴国」も百済から日本に移り住んだ人たちの苦渋の決断によるものであった。百済と渤海という違いこそあれ、共通するのは朝鮮半島の国の矜持と実益を秤にかけて生み出された日本の呼称であるということである。

正倉院文書では実務的な内容のものも、手紙の形式を取ることがある。それは、確実に宛先の人物に届き、こちらの要望を受け入れてほしい時に取られる方法である。通常のルールを逸脱した願いごとは「啓・状」という形式で書かれた。文章の〈形式〉というものが大きな意味を持っていたのである。

また、用字についても正倉院文書中に興味深い例がある。「運」と「漕」の使い分けである。造石山寺所は石山寺の造営を司った機関である。造営には膨大な木材が必要であり、そのために山から木を切り出し、石山まで運ばなければならない。人手も経費もかかる。

その経費は材木を筏に編んで川や湖を流すのと、陸地を運ぶのに違いがあり、担当者にとって重要な点であった。日本語では同じハコブであるが、水運を用いる場合をとくに「漕」と書くことによって、その違いを明確に記そうとしている。

職務を能率良くこなそうとする官人の努力がこの用字に現れているのである。これは「耳」を命令文に多用した意識と共通する。

さらに、報告書『正倉院文書注釈 造石山寺所解移牒符案(三)』(研究分担者 桑原祐子執筆)によって、正倉院文書の読解を進める事が出来た。

具体的には「造石山院所解」をはじめとする一〇通の文書に訓読・現代語訳を付し、さらに詳細な注釈を加えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

中川ゆかり、皇后磐之媛の死 - 日本書紀における后妃記述の手法 -、『萬葉集研究』35、査読無、2014年、285~343ページ

荻原千鶴、「出雲国風土記」の想像力と時空、『古代出雲ゼミナール』、査読無、2014年、136~185ページ

荻原千鶴、「出雲国風土記」の時間表象 - 「大穴持命」と「斐伊川」 -、『風土記研究』37、2014年、71~91ページ、査読有

荻原千鶴、九州風土記と「出雲国風土記」 - 中国南朝地方誌・「水経注」をめくって -、『古事記年報』57、2015年、1~34ページ、査読無

中川ゆかり、日本上代における「耳」 - 漢文助字との逢会 -、『萬葉』220、2015年、37~70ページ、査読有

桑原祐子、正倉院文書注釈 造石山寺所解移牒符案(三の1)、『古代学』8、2016年、14~31ページ、査読有

中川ゆかり、桴工達の訴え - 下道主の文書作成の苦心 -、『正倉院文書の歴史学・国語学研究』、2016年、81~110ページ、査読無

桑原祐子、正倉院文書における文末の「者」、『正倉院文書の歴史学・国語学研究』、2016年、111~156ページ、査読無

桑原祐子、写経生・実務担当者の選択 - 「啓」という書式を選ぶ時 -、第12回若手支援研究プログラム『漢字文化の受容 - 東アジア文化圏から見る手紙の表現と形式』、2017年、66~83ページ、査読無

[学会発表](計8件)

荻原千鶴、「出雲国風土記の位相 - 九州風土記との対比から -」、古事記学会、2014年

荻原千鶴、古代の<道>、島根県奥出雲町講演会、2014年

桑原祐子、正倉院文書の「運」と「漕」、奈良女子大学古代学学術研究センター講演会、2014年

中川ゆかり、渤海国書における「彼国」と「貴国」、正倉院文書研究会、2015年

荻原千鶴、風土記の時空、日本女子大学文学研究科講演会、2015年

荻原千鶴、古代文学の中の女性達、島根県奥出雲町講演会、2015年

荻原千鶴、海幸・山幸の神話、奈良県紀万葉プロジェクト講演会、2015年

桑原祐子、写経生・実務担当者の選択、若手支援研究プログラム「漢字文化の受容 - 東アジア文化圏から見る手紙の表現と形式」、2016年

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川ゆかり (NAKAGAWA YUKARI)

研究者番号：30168877

羽衣国際大学 人間生活学部 教授

(2) 研究分担者

荻原千鶴 (OGIHARA TIZURU)

研究者番号：20109226

お茶の水女子大学 文教育学部 教授

(3) 研究分担者

桑原祐子 (KUWABARA YUUKO)

研究者番号：90423243

奈良学園大学 人間教育学部 教授

(4)研究協力者 ()